

## 印象 1 3 編 — 9 月の総評に代えて

○ 林 桂 ○

### ● 青野 椰 栄 ●

父に子猫の名前を聞いてみる

\* 父は子猫を飼いはじめた。当然、名前をつけて可愛がっているのだが、家族に相談したり、話したりはしない。父の家族との距離の取り方のなかに、ほのかな哀愁と孤独が感じられる。

### ● 細村 星 一 郎 ●

虫籠に風とじこめておくことも

\* 風を閉じ込めておく虫籠には、虫は不在なのだろう。しかし、風は閉じ込められることで風でなくなる。翻って、虫籠の中の虫も、虫でなくなっているのかもしれない。高校生が、マーキング調査で、蟬の寿命が俗に言われるものよりも長いことを明らかにしたという報道に接した。通説の短い蟬の寿命は、人工的飼育下でのものだったらしい。言わば蟬でない蟬の寿命だったらしいのだ。

### ● 長谷川 柊 香 ●

甥っ子に死を説明する

\* 物心ついたときに、父母に聞きづらい  
思いがするものがある。時に少し距離の  
ある叔父、叔母には尋ねることができる  
かもしれない。甥っ子は「死」について、  
質問する。ここで、叔母（叔父）は、「説  
明」することに躊躇はしない。

● 桜望子 ●

誰かを呼ぶ  
鳥の声に目が覚めて  
一人で生きていけちゃう寂しさ

\* 一人で生きる寂しさではない。「生き  
ていけちゃう」寂しさ。一人で生きるこ  
とは寂しくない。しかし、そのように生  
きていけることは、寂しいのだ。

● ゆうな ●

ここでないどこかなら  
幸福になれる気がしていた  
幼い日々

\* 自分の家庭以外の家族を意識するよう  
になるころ、自分の家族に小さな違和感  
を持つようになることがある。自分の本  
当の居場所や家族が他にあるような気も  
する。誰も、一度は感じたことかもしれ  
ないが、忘れてしまっている。

● 長野小夢 ●

「おはよう」の  
タイミングのがして  
放課後まで引き摺る

\* 何気なさそうな朝の挨拶が、自分を相手  
手に意識してもらうささやかな手段だっ  
たのである。それを逃した一日は、後悔  
が尾を引く。

● 桜望子 ●

褒められたい  
だけだった  
母の遺影へと  
飾るすすきの大きなふくらみ

\* 最終行の「すすきの大きなふくらみ」  
に託された思いの深さ。すすきは悲しみ  
でふくらんでいる。

● 桜望子 ●

雨上がり  
心臓ぎゅっとなる匂い  
ずっと迷子のような気がして

\* 「ずっと迷子のような気がして」のよ  
うな思いで生きる。「自分探し」という  
言葉があるが、作者の思いはもっと茫茫  
とした探せぬ自分であり、また刹那的に  
襲われる思いであらう。

● 射矢らた ●

母を叱る

謝ることが  
山ほどあるのに

\* 母は古い、何時しか指導権は娘が持つようになつてゆく。「叱る」はその関係だ。しかし、来し方を見れば、母の庇護の大きさを思わずにはいられない。

● 桜望子 ●

君の死を  
聞いて眺めた夜の海  
漁船の光が  
遠ざかってゆく

\* 遠ざかりゆく漁船の光は、遠ざかりゆく君の魂に重なって見える。

● 加藤美紀 ●

はじめてのあん肝を  
食べた娘が一言  
「お父さん、  
またこのお店にこようね」

\* 母の思いは、いつまた来られるやらと  
いうことかもしれない。娘さんの美味への  
素直な反応には、鮫鰯料理の価格意識

はない。しかし、娘にとって、生涯忘れられない数少ない場面となったかもしれない。家族のほのぼのとした幸せな場面である。

● 金澤春葉 ●

いい夕日だから真っ暗になるまで  
影で犬をつくってあそぼう

\* 影絵遊びで「犬」をつくる。なぜ、犬か。わからない。しかし、「いい夕日」の幸福感の中では、作者に他の選択はないのだろう。

● 三千男進 ●

桜咲く  
あの日  
最も遠い今日

\* 「桜咲く／あの日」が、晴れやかな一日だったのか、悲しみの一日だったのかは分からない。しかし、作者にとっては、忘れられない特別な一日だったのだ。そこから続く今日という日は、その日から最も遠い日に当たる。日々、今日は「あの日」から遠ざかりゆく。その現在という立ち位置を思う。

・ 名前を確認して、桜望子氏の作品が4編あることに驚いた。どれも深い心の襞

を感じさせる。また、全体的に、若い人の作品が多かった。今月は、心に残る作品は特に多かった。子猫とお父さん、影絵の犬、あん肝の娘さん、甥っ子と叔母の問答。どれも好きである。